

# 鳥海物語③ (全6回)

## 胆沢城統治期

平谷 美樹

わたしは胆沢川と北上川の合流近くにある段丘である。

朝廷の軍と阿弖流為の戦いは、蝦夷軍の大勝がつづいた。朝廷の軍は将軍を変えて、何度も攻めてきた。戦は十数年にも及んだ。

そして阿弖流為は敵の将軍、坂上田村麻呂に降伏する。田村麻呂が強かったのか、阿弖流為がこれ以上の戦いは土地を荒廃させると考えたからか、それは分からない。

阿弖流為の降伏によって胆沢の地まで侵出してきた朝廷の勢力は、川を挟んだ南の土地に城を築いた。胆沢城である。翌年にはずつと北に志波城が築かれる。その後、志波城は廃されて徳丹城が築かれる。その頃、わたしの上にあった集落は消えた。住んでいた者たちはどこへ行ったのか。胆沢城が造られたので、北へ逃げていったのかもしれない。

しばらくして徳丹城も廃されて、胆沢城内に幾つもの役所が作られ始める。中央の役人たちは、北の蝦夷が服従したので城を置く必要が無くなったのだと言っ

ていた。しかし、中央勢力は胆沢城より北は、直接的な統治ができていないと考えていたようだから、北の蝦夷たちの抵抗が激しくて朝廷の軍が撤退してきたというのが真相かもしれない。

その頃、わたしの上にもまた集落が営まれる。住んでいたのは胆沢城の役所に勤める者たちが多かったように思う。釉薬をかけた高価な陶器を使う者たちもいた。中央から来た役人たちの中には、地元の勢力と婚姻関係で強い繋がりを作っていく者たちもいた。中央勢力にとっては、蝦夷たちへの影響力を強めるため、蝦夷にとっては中央勢力の中で生き抜くためである。そんな中から、有力な豪族が誕生して行く。

それは胆沢ばかりでなく、東北各地で起こったことである。豪族たちは、朝廷側の血筋である苗字を名乗る。しかし、朝廷にとっては、彼らはいくまでも恭順した蝦夷に倅囚なのだ。

そして、時と共に胆沢城も衰退して行った。